

第13回「西高フォーラム」

—公開シンポジウム—

ご案内

共催 一般財団法人西高会
都立西高同窓会
後援 杉並区教育委員会

一般財団法人西高会と都立西高同窓会では、本年も、杉並区教育委員会の後援を得て、「西高フォーラム」を下記の通り開催いたします。今年は昨年、夏季医療実習に参加した西高生徒による報告と、社会で活躍する同窓生による討論を行います。広く地域の皆様をはじめ生徒、保護者、教職員、同窓生のご参加をお待ちしております。土曜の午後のひととき、お楽しみ頂きますようご案内申し上げます。(このご案内は、近隣の方々や西高関係者に配布しております。)

- 日時：2017年6月10日(土)13時10分～16時25分 開場12時30分
- 会場：都立西高視聴覚ホール(西高正門を入れて左側の建物)
- 入場無料、車でのご来場はご遠慮願います。

第1部 在校生によるフォーラム 13:10～14:10

『志摩市民病院夏季臨床実習報告』

第2部 同窓生によるフォーラム 14:25～16:25

『これからの地域医療 ～国際化をふまえて～』

第1部 「志摩市民病院夏季臨床実習報告」

平成28年7月25日から8月26日にかけて、本校の1・2年生9名が、国民健康保険志摩市民病院及び周辺地域で地域医療実習に参加しました。実習は月曜日から金曜日までの5日間、移動等を含めると7日間に及び、その内容は以下のとおり多岐に渡るものでした。

日(午後)現地へ移動・泊

月(午前)オリエンテーション・患者割当て(午後)担当患者回診・ワークショップ

火(午前)外来・救急・リハビリ(午後)担当患者回診・放射線技師研修・検査技師研修

水(午前)訪問診療・看護(午後)担当患者回診・担当患者カンファレンス・手術見学

木(午前)外来・救急・透析医療(午後)担当患者回診・介護事業所研修

金(午前)外来・救急(午後)研修まとめ発表会 ワークショップ「大学生生活の目標」

土(午前)東京へ移動

この地域医療実習、正確には伊勢志摩・地域医療実習は、本校同窓生で国民健康保険志摩市民病院の江角院長から一昨年度中に西高会に御提案をいただいていたものを昨年度に実現したものです。今回は、同病院が主催する地域医療実習を本校で生徒に周知して参加者を募るという形式で実施したため、本校教職員による生徒引率はなく、生徒は自分で新幹線や電車の時刻を調べたり、約1週間の滞在に必要な物を揃えたりして実習に向かいました。現地では江角院長を始め病院のスタッフの方々、三重大学の医学生の方々、そして地元の方々に大変お世話になりながらの毎日だったようですが、実際に患者の方々に向き合っていく医療実習を通じて、参加した生徒は医学を志す決意を新たにしました。また、生徒が自主自律の気概を発揮する良い機会ともなったようです。今回のフォーラムでは、生徒が地域医療実習を通じて何を感じたのか、そして何を考えたのかを生徒本人から具体的に報告させていただきます。

第2部「これからの地域医療 ～国際化をふまえて～」

コーディネーター

鎌田 實(西 19 期) 諏訪中央病院 名誉院長

超高齢社会に対応し、国は 2025 年までに全国各地に地域包括ケアシステムをつくるように勧めています。医療や介護、福祉、住民がネットワークをつくり、高齢になっても、障害をおっても、身近な地域でずっと住み続けられるようにするシステムです。これまで地域医療や地域福祉は、公的制度や専門職の人が中心になってきましたが、地域包括ケアでは、ボランティア活動や住民同士の助け合いといった、住民の力がポイントの一つになります。ぼくは 30 年前から、諏訪中央病院がある茅野市を中心に、ユニークな地域包括ケアづくりに取り組んできました。その経験を活かして、今若者たちと一緒に、日本各地の地域包括ケアづくりのお手伝いを始めています。

チェルノブイリの放射能汚染地へ、25 年間 102 回の医師団を派遣してきました。12 年前から毎年 3-4 回、イラク難民キャンプへ支援に入っています。世界の平和に少しでも貢献したいと考えています。

パネリスト

竹村 洋典(西 32 期)三重大学大学院 医学系研究科 教授

高齢者人口が増え続ける日本。しかも多くの日本人は病院など医療機関で人生を終えます。一生で使う医療費の半分以上は 70 歳以降に使用されます。だから我が国の支出の 30%以上は医療や年金等の社会保障にかけられており、もう限界です。日本の出来高払いの診療報酬制度がそれをさらに助長しています。では、今後の日本の地域医療はどうすればいいのか。地域医療機関での診療や在宅医療のプレイヤーである「総合診療」がキーと言えます。日本と同様に高齢化社会を近い将来に迎えるであろう国々にそのエビデンスを発信していくことが重要です。

渋谷 和子(西 33 期)筑波大学 医学医療系 准教授

子供の頃いつも診てくださっていた近所の内科の先生を心から尊敬し、医師になりたいと思いました。研修医時代に診療活動の中で人間が生来持っている病気に抵抗する力、生体防御能を実感する機会が多く、免疫学に興味を持ちました。その後、臨床の現場と基礎医学の研究室を行き来し、医学の進歩にとり臨床と基礎医学研究は車の両輪であるとの思いを強くしました。現在は免疫学の研究と医学教育に携わっております。研究室にはベトナムやブラジル、台湾など海外からの留学生も多く、彼らは研究室で学んだことを母国の医療に生かしたいと考えています。私達の研究成果が少しでも世の中の医療に役立つことを夢見て日々研究しております。

渋谷 陽子(西 50 期)つくばセントラル病院 放射線科部長

世界でもっとも多くの X 線 CT 装置を保有する国をご存知ですか？そう、日本です。現在の医療は画像診断なくして成り立ちません。そして日本はその傾向がより強いといえます。私たち放射線科医は、より安全に、より正確に、より迅速に診断に導くために、画像検査に読影レポートをつけ、病院で行われる医療の質を陰から支えています。希少種である放射線科医は中核病院に行かないと見つけることは難しいですが、インターネット回線を利用した遠隔画像診断や CT・MRI などの先端医療機器の地域内共同利用を通じて、より身近な存在となりつつあります。画像の向こうにいる患者に思いを馳せつつ、臨床医の先生方と共に悩み、時に導きながら、日々奮闘しています。

江角 悠太(西 52 期)志摩市民病院 院長

「たくさんの人に支えられ、助けられた人生だった。だから人に尽くすのは当たり前だ。」これは先日亡くなった祖父が残していった言葉です。60 歳から 95 歳まで、亡くなる 4ヶ月前まで、鶴巻温泉で地域医療を行っておりました。最期は、彼が育て、ともに地域医療に尽力してきた看護師、ケアマネなどに支えられて亡くなりました。医師は目の前の人を助ける、目の前の地域を助ける、当たり前のことですが、実は私たちも地域に助けられている。田舎も都会も一緒です。地域医療の「地域」とは地球上のすべての地域のことを指す、そんな感じで医療をやっております。このたびはよろしくお願い致します。